

# 中世後期の北野社における記録

——『禅盛記録抄』と密乗院について

高橋 菜月

日本史学専門 博士前期課程 2年

## 1. はじめに

本調査の目的は、中世後期北野社関連史料の影印本・写真帳・原本を所蔵する機関へ赴いて、実地に関連・検討し、一部は撮影収集して分析することである。本調査は次の日程・場所で行われた。①2016年7月13日から14日の間、東京大学史料編纂所にて、②同月19日から21日の間、京都府立総合資料館および京都橘大学図書館において。

本稿は中世後期の北野社を題材に、将軍家御師職<sup>1)</sup>(以下御師)を継承した松梅院と社内組織に関する研究の一環として行うものである。北野社は延暦寺や室町幕府の動向を追う上で重要な神社にもかかわらず、基礎となる組織の全体像が十分に把握されていない。そうした研究の遅れの原因の一つとして、史料の所蔵形態の問題がある。

近年山田雄司氏が指摘したように、北野社に関わる史料は、明治の神仏分離令による社僧(法体の神官)の還俗や、神官身分の継承形態の変化によって売却・散逸の運命を辿った<sup>2)</sup>。そうした状況の中で比較的史料が良く残っているのが、前述の松梅院関係の史料である。本稿では、「密乗院禅盛」という人物が作成した記録の抄出たる『禅盛記録抄』<sup>3)</sup>(以下『記録抄』)を取り上げて翻刻を行い、その作成背景を検討することを通じて密乗院についてわずかなりとも新知見を得られたらと考える。

## 2. 『禅盛記録抄』の翻刻

(表紙)

- 一、就<sub>ニ</sub>祭礼<sub>一</sub>渡物事<sub>ニ</sub>在<sub>レ</sub>之、
- 一、境内大事<sub>ニ</sub>付て料料事<sub>ニ</sub>在<sub>レ</sub>之、
- 一、御経御成用意事<sub>ニ</sub>在<sub>レ</sub>之、
- 一、御憑事<sub>ニ</sub>在<sub>レ</sub>之、
- 一、池田庄光明山寺違乱事<sub>ニ</sub>在<sub>レ</sub>之、
- 一、新賀木葉荷事<sub>ニ</sub>在<sub>レ</sub>之、
- 一、菅原庄御経御教書事<sub>ニ</sub>在<sub>レ</sub>之、
- 一、勅使半昼事<sub>ニ</sub>在<sub>レ</sub>之、

- 一、禅親借物棄破事<sub>ニ</sub>在<sub>レ</sub>之、
- 一、新御寄進事<sub>ニ</sub>在<sub>レ</sub>之、

寛正二年禅盛記録内少々写<sub>ニ</sub>置<sub>レ</sub>之、

①就<sub>ニ</sub>御経御成<sub>一</sub>申<sub>ニ</sub>請御物等<sub>一</sub>事<sub>ニ</sub>在<sub>レ</sub>之、<sup>寛正二年</sup>

申<sub>ニ</sub>請召御具足<sub>一</sub>事、

- 一、御銚子 式具、一、御片口 壹具、
- 一、御法物、一、御湯煎物 皆具、

已上

経王堂御棧敷御物事、

- 一、御焼香、一、召御茶、一、御奈良紙等、
- 一、御水瓶、一、御盥、

已上

此分者例年之儀候坎、

寛正二

九月廿八日 禅盛<sup>在判</sup>

初井殿

如<sub>レ</sub>此以<sub>ニ</sub>注文<sub>一</sub>初井方へ遣事旧例也、

- 一、五日御成<sup>巳刻</sup>如<sub>レ</sub>先々<sub>ニ</sub>式<sub>一</sub>・三献御祝<sub>ニ</sub>在<sub>レ</sub>之以後、被<sub>レ</sub>改<sub>ニ</sub>御装束<sub>一</sub>、経王堂<sup>江在</sup>御成<sub>ニ</sub>、一・二之巻御聴聞已後御成<sub>ニ</sub>在<sub>レ</sub>テ、供御ニ点心被<sub>レ</sub>聞食<sub>ニ</sub>還御<sub>ニ</sub>在<sub>レ</sub>之、同被<sub>ニ</sub>召出<sub>一</sub>人数事、禅盛<sup>御太刀組</sup>・明範<sup>(松光院)千疋御太刀組</sup>・<sup>(永琳院)太刀</sup>・慶範<sup>同</sup>、

已上

- 一、同進物色々事、

御太刀 一腰<sup>白</sup>、御練緯 五重、御香合 一ヶ<sup>珪璋</sup>、御盆 一枚<sup>剔紅</sup>、御引合 十帖、已上

法印権大僧都<sup>マ</sup>禅口

御劔被<sub>レ</sub>下間、御折紙二千疋、但巻進<sub>ニ</sub>上<sub>一</sub>之、<sup>(組)道歌</sup>

- 一、同御前御相伴衆、

管領 <sup>(細川勝元)</sup>山名殿 <sup>(山名是豊)</sup>一色殿 <sup>(一色義直)</sup>京極殿 <sup>(京極持清)</sup>讃州 <sup>(細川成之)</sup>以上

同御酒 奈良 天野 柳 為<sub>レ</sub>召用<sub>ニ</sub>意<sub>一</sub>之、

同御雑掌方 公方春阿方<sup>(春阿弥)</sup>へ悉皆請<sub>ニ</sub>取<sub>一</sub>之、

- 七日、御成御相伴衆へ為<sub>ニ</sub>御礼<sub>一</sub>参上申也、

同日、御湯煎風呂・御片口・御銚子二具・御水瓶・御盥・御供方物、初井方へ返弁也、<sup>(風呂)</sup>

26

以下嚴重之御願料所<sub>(マ)</sub>、社家知行無<sub>(マ)</sub>相違<sub>(マ)</sub>處、普広院殿様御代已後、同国自<sub>(マ)</sub>光明山寺<sub>(マ)</sub>遊佐河内守代官職之時、相<sub>(マ)</sub>語彼方<sub>(マ)</sub>号<sub>(マ)</sub>寺領<sub>(マ)</sub>、神領之内内<sub>(マ)</sub>拾町余<sub>(マ)</sub>土貢漆拾余石云々、掠<sub>(マ)</sub>申<sub>(マ)</sub>公方<sub>(マ)</sub>彼下地押領之事、非<sub>(マ)</sub>拋之至也、然間長禄二年当社領不知行之在所悉被<sub>(マ)</sub>返下<sub>(マ)</sub>之刻、任<sub>(マ)</sub>最初御寄進附狀<sub>(マ)</sub>之間、社家一同知行之處、今度又以<sub>(マ)</sub>已前之非例<sub>(マ)</sub>及<sub>(マ)</sub>訴詔<sub>(マ)</sub>之条、言語道断之次第也、惣而諸神領何以<sub>(マ)</sub>非<sub>(マ)</sub>由緒之地<sub>(マ)</sub>、在所不<sub>(マ)</sub>可<sub>(マ)</sub>在<sub>(マ)</sub>之者坎、此一事御成敗在<sub>(マ)</sub>之者、方々之競望於<sub>(マ)</sub>諸神領不<sub>(マ)</sub>可<sub>(マ)</sub>有<sub>(マ)</sub>際限<sub>(マ)</sub>者也、殊以<sub>(マ)</sub>被<sub>(マ)</sub>成<sub>(マ)</sub>下不易御判等<sub>(マ)</sub>候迄、仍案文<sub>(マ)</sub>、然上者自今以後不<sub>(マ)</sub>可<sub>(マ)</sub>有<sub>(マ)</sub>他妨<sub>(マ)</sub>者也、所詮被<sub>(マ)</sub>任<sub>(マ)</sub>此等之嚴密御成敗之旨<sub>(マ)</sub>、早被<sub>(マ)</sub>退<sub>(マ)</sub>彼障<sub>(マ)</sub>全<sub>(マ)</sub>被<sub>(マ)</sub>用<sub>(マ)</sub>傍為<sub>(マ)</sub>奉<sub>(マ)</sub>押<sub>(マ)</sub>御祈禱之忠節勤<sub>(マ)</sub>、粗謹支言上如<sub>(マ)</sub>件、

寛正二年五月 日(j)

一、寛正二年五月七日、社家奉行・同加賀守御使、来九日梶尾春日大明神御影<sub>(飯尾之種)</sub> 公方様為<sub>(飯尾之清)</sub>御拝見<sub>(マ)</sub>御成<sub>(マ)</sub>云々、仍一条ノ通馬場面掃除事、可<sub>(マ)</sub>申付<sub>(マ)</sub>由在<sub>(マ)</sub>之、小川坊城殿へも以<sub>(マ)</sub>使申<sub>(マ)</sub>之<sub>(マ)</sub>云々、其故者一条之裏者彼下知<sub>(マ)</sub>云々、(k)

一、禪親借物棄破御奉書案

北野宮寺領所々事、号<sub>(マ)</sub>先借<sub>(マ)</sub>錢主等押持<sub>(マ)</sub>云々、太不<sub>(マ)</sub>可<sub>(マ)</sub>然、所詮於<sub>(マ)</sub>禪親法眼負物<sub>(マ)</sub>者被<sub>(マ)</sub>棄破<sub>(マ)</sub>候迄、早全<sub>(マ)</sub>直務<sub>(マ)</sub>可<sub>(マ)</sub>被<sub>(マ)</sub>專<sub>(マ)</sub>神役<sub>(マ)</sub>由被<sub>(マ)</sub>仰出<sub>(マ)</sub>也、仍執達如<sub>(マ)</sub>件、

②寛正二

四月廿八日

(飯尾)  
之種  
飯尾加賀守  
之清

(禪予)  
松梅院(i)

一、西京木屋之内、与<sub>(マ)</sub>北山<sub>(マ)</sub>之境ニ新御寄進と云所在<sub>(マ)</sub>之、此内三分貳貫五百卅文沙汰<sub>(マ)</sub>云々、梶井御門跡別当之御時より依<sub>(マ)</sub>無<sub>(マ)</sub>御催促<sub>(マ)</sub>于<sub>(マ)</sub>今無<sub>(マ)</sub>沙汰仕處、長禄二年社務職御還補之年より竹内殿御催促雖<sub>(マ)</sub>在<sub>(マ)</sub>之、更不<sub>(マ)</sub>承引申<sub>(マ)</sub>、平木入道にも不<sub>(マ)</sub>申付<sub>(マ)</sub>罷過<sub>(マ)</sub>云々、今度禪盛ニ堅被<sub>(マ)</sub>仰出<sub>(マ)</sub>候間、平木入道ニ申付了、雖<sub>(マ)</sub>然已前者夏季ニ一円ニ沙汰<sub>(マ)</sub>云々、只今殊ニ不便ニ存間、夏壹貫五百卅文可<sub>(マ)</sub>申付<sub>(マ)</sub>候、冬季ニ一貫文可<sub>(マ)</sub>沙汰申<sub>(マ)</sub>由歟<sub>(マ)</sub>申之、

一、請取新御寄進巷所御地子事、

合貳貫伍百卅文者

右所<sub>(マ)</sub>請取<sub>(マ)</sub>如<sub>(マ)</sub>件、

文安四年六月

榮祐<sub>(良什)</sub>

自<sub>(マ)</sub>社務<sub>(マ)</sub>請取案文被<sub>(マ)</sub>出候、即写置了、(m)

(傍線・括弧・句読点・返り点は筆者、以下同)

### 3. 『禪盛記録抄』作成の背景

下坂氏は『記録抄』の作成者を松梅院禪予と比定し、そこには8月の北野祭、10月の万部経会や北野社の恒例仏神事などのほか、八朔の贈り物、境内での火事の処理など、多岐にわたる内容が記述されていると指摘した。一方で、本記録が作成された背景については、禪予が禪盛の子であったとされることから、実父の日記から抄出したものと述べるにとどまり<sup>6)</sup>、それ以上の検討は行わなかった。それ故に『記録抄』の作成意義や、密乗院という院家の実態が十分に解明されなかった。

たしかに『記録抄』の下敷きには『禪盛記録』があることは確かであるが、禪予が『禪盛記録』を入手した時期を特定する上で重要な記述が、『北野社家日記』(以下『社家日記』)に残されている。

一、密乗院へ以<sub>(禪英)</sub>明珠院<sub>(明雅)</sub>、禪盛法印御経御成記録借遣<sub>(マ)</sub>處、三帖到来也、<sup>7)</sup>

毎年10月に開催される万部経会に先立ち、禪予が禪英に將軍の御成記録を求めたところ、3冊の記録が到来したとのことである。前項で翻刻した史料の下線部①以下では、禪予が禪盛期の万部経会の記録をまとめていること、禪予がこの時求めた内容が『記録抄』にあることが分かるから、『記録抄』の作成時期は延徳2年10月以降と考えられる。そしてこの時期は、禪予が御師・松梅院院主という立場にあった時期でもある。

さて、ここで禪予という人物について、簡単に説明しておく。禪予は松梅院の傍流である松善院出身であったが、松梅院禪親の養子となった。そして、一度目は養父禪親からその子禪椿への継承の中継ぎとして(寛正元年～文正元年)、二度目は禪椿失脚にともない御師・院主に就任している(長享元年～明応3年)<sup>8)</sup>。また禪予は文筆に堪能であり、抄録や天神縁起の筆写など、北野社の記録類の収集に熱心だったとされる<sup>9)</sup>。『記録抄』もその一例であるが、彼の記録収集に対する熱心さは性格や信仰によるものではなく、彼が置かれた立場に起因するものであった。

二度目に御師・院主に就任した禪予は、当初から不安定な立場にあった。それは禪予が傍流出身だということもあったが、それ以上に、松梅院の継承にあたり禪予が継承するはずであった目録・記録類<sup>10)</sup>や御師に就任する上で重要な証文さえも、先代の禪椿が所持したまま逐電してしまい<sup>11)</sup>、禪予にこれらが継承されなかったためである。つまり禪予が行った記録類の収集

とは、御師・院主の継承を体現する証文・記録がない中で、禪予が取らざるをえなかった一つの手段であった。

こうした禪予による記録類の収集は、彼が御師・院主に就任した長享元年<sup>(1487)</sup>から開始された。まず禪予は、「社家記録」(『社家日記』第七、89-140頁)に見えるように、「妙蔵院所より見<sub>レ</sub>之申候」、「社領惣目録、自<sub>レ</sub>密乗院可<sub>レ</sub>書加<sub>レ</sub>由分」<sup>12)</sup>「此条々宝成院申<sub>レ</sub>々」<sup>13)</sup>と、松梅院以外で御師に関わる由緒を持つ院家の記録・目録をもとにして、北野社領や先例、諸仏神事・諸職の補任に関わる故実を整理した。この禪予による記録類の収集は翌年以降も継続され、永琳院<sup>14)</sup>や松善院禅融<sup>15)</sup>らの記録がその対象となっている。

以下では、「社家記録」と『記録抄』の内容を比較対照させることを通じて、禪予がどのようなことがらを記録しようとしたか、その関心の推移を探ることとしたい。

さて、『記録抄』の記述を内容別に整理すると、a 万部経会、b 勅使の座、c 供僧の補任状、d 八朔、e 近江国の社領に関わる訴訟、f 北野祭、g 検断、h 河内国八ヶ所に関わる訴訟、i 内陣御正体の裏書、j 山城国池田荘、k 將軍の御成、l 禅親の債務棄破、m 新御寄進をめぐる別当の地子催促、となる。「社家記録」では、社領や仏神事といった北野社の運営に関わる内容を整理されているのに対し、『記録抄』は御師(a、k)など院主が相伝した職や、松梅院の院家としての活動(d、l)に関わる内容が整理されている。ではこれらを収集する上で、松梅院院主の代官や後見をしていた門弟の記録だけでなく、さらに密乗院の記録を求めたのはなぜか。以下、密乗院という院家を検討する中で、解明していきたい。

#### 4. 禅盛と密乗院について

『記録抄』は、禅盛が御師に就任したばかりの時期の記録である。補任状が残っていないため具体的な時期は不明だが、禅盛が御師に就任したのは寛正2年4月28日以降であろう。前代の御師である禅親は、当初養子の禪予に「当坊(松梅院)跡」を譲与する予定であり<sup>16)</sup>、そのため足利義政は院主の代替わりにあたり、禅親の債務を棄破している(本稿第2項の下線部②)。しかし結局禅親は義政の怒りを買ひ、禪予とともに松梅院を追われてしまった。院主不在となった松梅院に入ったのが禅盛であり、彼は寛正6年<sup>(1465)</sup>に「重科」によって御師を罷免されるまで、松梅院の住坊で

活動していた<sup>17)</sup>。この禅盛のように密乗院が御師に就任した例としては、永享期の密乗院慶雅(禅栄)があり、足利義教の不興を買って失脚した松梅院禅能から一代おいて、御師に就任している。

さて、禅盛や禅栄が継承した「密乗院」という院家の北野社内における立場は若干複雑である。もともと北野社には、禅陽(松梅院祖)・守慶(光園院祖)という2人の御師がいたが、守慶が失脚してからは、原則として禅陽の子孫が御師を継承した<sup>18)</sup>。この両派の派閥争いについては鍋田英水子氏が明らかにしているが<sup>19)</sup>、禅栄は当初光園院の通字(「慶」)を使用していたが、永享5〜8年の間に松梅院とその親類が使用する通字(「禅」)が入った名に変更している<sup>20)</sup>。ここから、一見すると、密乗院は改名を機に光園院流から離れ、松梅院流に組み込まれたように見えるが、必ずしもそうではないのである。

北野社内における密乗院の複雑な立場を示す好例として、密乗院禅英の事例がある。明応5年7月、足利義澄から北野社で遷座・遷宮など神殿に関わる諸事を担当する「御殿職」に補任された禅英は、「御殿職事ハ無力にてハもたれぬ御事」として、松梅院に代わって自身を、御師・公文に補任するよう重ねて要求し<sup>21)</sup>、結局松梅院との訴訟に発展している。一方で、その禅英に対して松梅院は永正元年に「摂津国富田鶴飼瀬等」を寄進した上、安定的な経営のために諸事において後ろ盾となることを起請している<sup>22)</sup>。

密乗院は基本的には松梅院の門弟として活動して、その活動<sup>23)</sup>・継承<sup>24)</sup>を支える一方、松梅院流と光園院流<sup>25)</sup>という2つの派閥と、師弟関係を利用して絶え間なく関係を維持していた。そして時に幕府と関係を結んで、両派閥から独立して御師や社内の諸職を獲得していったのである。

それでは松梅院はなぜ複雑な立場にあった密乗院を、松梅院流に組み込んだのか。これは禅栄の改名問題と、『記録抄』の評価に関わる問題である。次項で検討していく。

#### 5. 密乗院記録の検討に向けて

禪予が行った記録類の収集は、禪予の子・禅光にも引き継がれた。禅光は、前述の密乗院禅栄が作成した「三年一請会引付」と「諸祠官記録」(『北野天満宮史料 古記録』)を筆写している。禪予・禅光により筆写された記録の性格を考える上で重要になるのが、禅栄の改名問題である。



松梅院は御師のほかに、社内において公文や御殿職、社内において「唯受一人」とされる重要な作法（「神道深秘」<sup>26)</sup>）を継承していた。しかし永享期に御師・公文<sup>27)</sup>は、松梅院→光藺院→密乗院という変遷を辿った。

一方で佐々木創氏は、御殿職・神道深秘については、失脚後も禅能が継承していたと指摘する<sup>28)</sup>が、禅栄の記録から御殿職は、禅能から禅栄へ継承されていたことが確認される。

右且任文応之故実、且致精誠之沙汰之状如件、

(御殿職)  
神殿大預法眼和尚泰禅判

(中略)

<sup>(1 4 3 6)</sup>  
永享八年丙辰二月中旬之比、以右旧記、書写之記、

奉行権少僧都禅栄<sup>判形如此</sup>（花押）

以自筆本写之<sup>29)</sup>

上の史料からすれば、永享8年の時点で禅栄は泰禅と同じく、三年一請会<sup>30)</sup>の故実を収集する必要がある立場（＝御殿職）にあったと言える。つまり禅栄は御師だけでなく、御殿職・神道深秘<sup>31)</sup>も継承していたのである。そして深秘の継承こそが、禅栄の改名の契機となったと考えられる。

深秘の継承は密乗院側から求めたことか、松梅院側から求めたことかは不明だが、少なくとも永享8年までの時点で、密乗院は他の光藺院流の諸院家から突出して松梅院に接近し、北野社の重要な神事の作法を継承する由緒を持つ院家となっていたのである。そしてこれこそが、松梅院が密乗院との師弟関係を維持する理由であり、戦国期に禅予・禅光が禅盛・禅栄の記録を求め、筆写した大きな理由であろう。

松梅院の立場が低迷している時期、密乗院は同じく御師としての由緒を持つ光藺院と異なり、御師・公文・御殿職のそれぞれの職の継承者として社内で活動し、その活動を記録している。密乗院の記録は松梅院にとっていわば、もう一つの松梅院院主の記録とも言えるものであった。『記録抄』に見られる多様な密乗院の活動は、全て松梅院の活動に投影できるものであり、禅予にとっては倣うべき先例となるものであった。

以上、簡単にではあるが、『記録抄』の作成背景と密乗院について検討してきた。密乗院の名は近世に入ると、北野社関係の史料から姿を消してしまう。しかし、中世後期の北野社を考える上で、密乗院が果たした役割は決して小さくない。現在は松梅院に伝来した

諸記録からのみでしか、その姿を追うことはできないが、今後の北野社研究において、密乗院の存在も重要な検討対象として考える必要がある。

なお、『記録抄』のひとつひとつの内容についての詳細な検討は、今後の検討課題である。

## 謝辞

この度の調査・研究で多くの方・機関にお世話になりました。特に『禅盛記録抄』の複写を入手するにあたって、東京大学史料編纂所だけでなく、原蔵者である北野天満宮、京都文化博物館学芸員の西山剛氏にご協力頂きました。この場を借りて、深く感謝いたします。今回の報告書では引用していませんが、京都府立総合資料館・京都橘大学図書館及び同学准教授尾下成敏氏にも、史料調査にご協力頂きました。感謝申し上げます。

## 註

- 1) 将軍家御師職とは室町将軍と師檀関係を結んだ神官・社僧を指す。神社内の特定の人物が補任され、相伝するものであり、将軍の参詣時に宿坊などを提供したり、将軍家のために祈祷を行うことを職掌とした（佐々木創「中世北野社松梅院史の「空白」——松梅院伝来史料群の批判的研究に向けて」、『武蔵大学人文学雑誌』39-2, 2007, 太田直之「室町幕府の神祇政策——将軍家御師職を中心に」, 同氏『中世の社寺と信仰——勧進と勧進聖の時代』, 初出は2007）。
- 2) 山田雄司「科研費報告書 北野天満宮旧蔵文書・古記録の目録作成および研究」（2007）。
- 3) 東京大学史料編纂所蔵『北野社旧記』（請求記号2012-248）。
- 4) 図録『特別展覧会 菅原道真公1100年記念 北野天満宮神宝展』より。翻刻・解説は下坂守氏が担当（京都国立博物館, 2001）。
- 5) 三枝暁子「北野祭と室町幕府」（同氏『比叡山と室町幕府 寺社と武家の京都支配』, 東京大学出版会, 2011, 初出は2007）。
- 6) 下坂氏前掲註4）。
- 7) 『社家日記』第一, 延徳2年9月24日条。
- 8) 佐々木氏前掲註1）。
- 9) 『社家日記』第六, 解題（竹内秀雄氏）。
- 10) 佐々木創「北野社家引付」を記す人々——なぜ二つの「社家引付」の内容は重複したのか（『武蔵大学総合研究所紀要』18, 2009）。
- 11) 石井裕一郎「松梅院禅予殺害事件と殿原衆の行動」（瀬田勝哉編『変貌する北野天満宮 中世後期の神仏の世界』, 平凡社, 2015）。
- 12) 『社家日記』第七（以下『第七』）「社家記録」138頁。
- 13) 『第七』「社家記録」128頁。
- 14) 『社家日記』第二, 延徳2年5月晦日条。
- 15) 『社家日記』第三, 延徳3年5月21日条。
- 16) 佐々木氏前掲註10）。
- 17) 佐々木氏前掲註10）。
- 18) 小泉恵子「松梅院禅能の失脚と北野社御師職」（『遙かなる中世』第8号, 1987）。
- 19) 鍋田英水子「中世後期「北野社」神社組織における「一社」」（『武蔵大学人文学会雑誌』29-1・2, 1997）。
- 20) 佐々木氏前掲註1）。
- 21) 『北野天満宮史料 目代日記』明応5年7月6日条。
- 22) 『第七』「社家条々引付」（79頁）。

- 23) 「御社参記録」(『北野天満宮史料 古記録』, 以下『古記録』245, 251頁)。  
 24) 『第七』「引付」(157-158頁)。  
 25) 永禄期に密乗院院主に就任した禅乗は, 光園院流の院主である明祇を「先師」と仰いでいる(国立歴史民俗博物館所蔵『北野神社旧蔵文書』186-3-18「室町幕府奉行人連署奉書」)。  
 26) 七夕の御手水神事や遷座, 本社末社の遷宮に関わる諸神事の作法・秘事を指す(佐々木氏前掲註1)。  
 27) 「諸祠官記録」(『古記録』193頁)。  
 28) 佐々木氏前掲註1)。  
 29) 「北野宮三年一請会条々記録」(『古記録』110-111頁)。  
 30) 三年一請会とは, 三年に一度, 神輿に対して修復箇所の特検を加え, そこで見出された修理の方針のもと神輿とその荘厳具を修復・新調する儀礼(西山剛「室町期における北野祭礼の実態と意義」, 瀬田勝哉編『変貌する北野天満宮 中世後期の神仏の世界』, 平凡社, 2015)。  
 31) 御殿職が管理する内陣の鍵は「成仁メ深秘伝授之時」預けられるものであること, 神道神秘が「神道深秘職」と書かれる「職」であったことから推測(『第七』「引付」157-158頁)。

### 【参考】松梅院・密乗院系図

佐々木創「中世北野社松梅院史の「空白」——松梅院伝来史料群の批判的研究に向けて」(『武蔵大学人文学雑誌』39-2, 2007)より引用。

